

3 フラメンコができるまで



トリアーナの宴1850（絵画）／1850年に描かれたトリアーナの宴の様です。川向こうに黄金の塔とヒラルダの塔が見えますね。この角度だと今のキューバ広場のあたりでしょうか。

Francisco de Paula Esribano Liñan

フラメンコは一体、いつ、どこで、どんな風にして生まれたのでしょうか。結論から言うと、実はその明確な答えはありません。いつどこでどんな状況で生まれたということ、人物や作品のようにはっきりといえるものではないからです。

もっともらしい話も語られてきました。でもそれは神話みたいなもので、それが事実だと証明するものはありません。あくまでも想像でしかないのです。そんな中でも、その謎を解き明かそうと、答えに近づこうと様々な研究がされてきました。どんな風に？ 例えば丹念に文献を当たります。古い新聞などを丁寧に見ていくと、フラメンコと関係すると思われる記事がいろい

ろ見つかりました。また歌詞やメロディを手掛かりにした分析などでも色々わかってきました。

文献に残る記述

『ドン・キホーテ』で有名なセルバンテスが1613年に発表した小説『ヒターニージャ』では、踊りを得意とするヒターナ娘が登場します。これは小説ですから作り話だとしても、ヒターノたちと芸能を結びつける何かがあったのかもしれませんが。1740～50年に書かれたとされる『トリアーナのヒターノたち』という手書きの書類にはトリアーナのヒターノの長老の孫娘がセビージャの貴族の館によばれ踊るという記

述があり、また1789年の『モロッコ書簡』という小説にもヒターノたちの宴が描かれています。時代がぐっと下りますが、1862年の『アンダルシアの情景』では、トリアーナの宴について、踊りについての考察や歌手の名前なども含め詳しく書かれています。

いつ？

フラメンコという言葉が、今私たちがその名前でお馴染みのアートをさして使われた一番古い記録は、1853年マドリードで開かれた夜会についてのことです。セビージャでも1860年代には同じように使われています。でも、もちろんフラメンコという言葉でよば

れるようになる前にも、その芽生えはありました。

フラメンコが生まれたのは1789年のフランス革命以降のことで、そしてそれが、今、私たちが知るような形を持つようになったのは18世紀後半以降の産業革命の頃、それまでの社会が変わり、封建時代から資本主義への移行の中で生まれたものと考えられています。この時期のスペインも、フランスとの戦争やたびかさなる内戦など、激動の時代でした。

フラメンコは悠久の歴史を持つ伝統芸能ではなく、近代に始まったモダンアートなのです。もちろん何もないと、ここに突然変異で生まれたわけではありません。

どこで？

これはアンダルシアで間違いありません。前述のマドリードの夜会についての記事でも、アンダルシア音楽と書かれていますし、古い文献のフラメンコを思わせる宴の記述はアンダルシアでのものです。

アンダルシアは、長い間、アラブ支配下にあり、その文化的影響を強く受けています。なので、フラメンコにもその影響がありますが、それだけではありません。カトリック教会での音楽や、ユダヤ人たちの音楽、交易で栄えた歴史から、アフリカや中南米の影響も受けています。またヒターノたちの存在なしにフラメンコはありません。文化のつぼのようなアンダルシア、それもセビージャやカディスがその中心だと考えられます。

どんな風に？

つまりフラメンコは、様々な文化の影響を受けたアンダルシアの地で、ヒターノたちをはじめとする民衆の中から、それまでにあった音楽や踊りをもとに生まれたものだと考えられます。

フラメンコが生まれる前、17世紀から18世紀にかけて、スペインだけでなく、ヨーロッパでも流行したのがファンダンゴです。ここでいうファンダ



19世紀に描かれたボレロの踊り手。スペイン舞踊は19世紀、ロマンチックバレエのダンサーたちが踊り、ヨーロッパ中で人気を博しました。ボレロやセギリージャ、カチューチャなどの踊りの要素は今もスペイン舞踊の中に息づいています。 Antonio Cabral Bejarano

ンゴは、フラメンコの歌のファンダンゴではなく、それよりもずっと古い踊りの曲です。この曲がアンダルシアの宴でもよく踊られていたようです。また、セギディージャ(シギリージャではなく、セビジャーナスなど多くの民族音楽舞踊の元となった)やボレロ(ラヴェル作曲のあの曲ではなく、スペインの舞曲)も、ファンダンゴ同様、フラメンコの曲種の素となった舞曲です。また、近年の研究では、サイネーテというコメディやサルスエラとの関連も指摘されています。

はじめは宴

フラメンコでは歌が重要だ、と言われます。実際、フラメンコをフラメンコたらしめているのはカンテでしょう。

カンテなしにはフラメンコはありません。でもそのフラメンコも、最初は

宴から、踊りから始まったのです。アンダルシアの庶民が苦しい生活や厳しい現実をつかの間でも忘れるために、歌い踊っていたのでしょう。

こういった宴で、みんなで楽しむお祭り騒ぎから、個人が、その芸がピックアップされ、演じられるようになってきたことが、また歌を尊重するようになってきたことが、フラメンコの成立の始まりだと考えられます。資本主義への移行の中で、芸能にお金を払う人が出てきたことも、フラメンコの成立と発展には欠かせない条件でしょう。

宴から生まれたからでしょうか。今も、宴は今もフラメンコにとっても大切。皆で歌い踊る一体感のあるフイエスタを体験したら、もうフラメンコと離れることはできません。宴では歌も踊りもギターも、みんな同じように大切です。そして、その“場”の雰囲気をおろそかにせず、そこにいるということも一つのアルテだと思うのです。



88のしかぜ
スペインに慣れてきてパーマをかけたのですがぼろアフロにされて泣いた頃。語彙数が一緒くらいの子供たちと話すのが好きでした。

志風恭子/1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。バセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。バコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。



トリアーナの宴1991
フラメンコ揺籃の地であるトリアーナ。かつてはヒターノたちが多く住んでいましたが、今は減っています。それでも時にフイエスタが行われます。これはディエゴ・カラスコの息子が生まれた時の街角でのフイエスタ。踊っているのはレメディオス・アマジャ。